BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

日本洋書協会会報

Vol. 33 No. 5（通巻384号）1999年5月

東京国際ブックフェア'99開催される

東京国際ブックフェア'99が有明の東京ビックサイトで4月22日から25日迄の4日間開催された。一番入場者で賑わうはずの24日（土曜日）は一日中雨が降り続いていたにもかかわらず主催者側の発表によれば4日間の入場者は46,000人を超えてこれまで最高となったとのこと、その意味では東京国際ブックフェアも一般に認知されてきたといえるかもしれない。今年の出展社は海外からの参加が例年よりも減って28社、主に中国、香港、韓国等の出版社だが、我々に馴染みがある欧米の出版社ではElsevierとGordon and Breachくらいのものでいささか寂しい感じがする。一方、国内企業が120社近く増えて446社ということからしても全体的に国際色がうすれてきているようである。

今年のブックフェアでは海外、国内の出版社の他、コンピュータを持ち込んでの編集制作プロダクション、電子出版・マルチメディア、デジタルパブリッシング、学習書・教育ソフト関係各社の出展が会場のほぼ半分近くを占めており、コンピュータ・ショーにでも紛れ込んだ感じで一般にいう「ブックフェア」とは違和感が無いでもないがこれも時代の流れというべきなのかもしれない。中でも大手の英会話学校やワイン業者が派手に宣伝活動をしているのが目立ったがこれも「ブックフェア」の一部といえるのかどうか、事の是非はともかくとして少々場違いの感があった。

洋書協会としてフェアに参加しているのは例年のように洋書バーゲンコーナーだけだが、こちらの方は売上新記録達成とはいかなかったようだが相変わらずの賑わい振りでデザイン、写真集等のグラフィックスもの、絵本等の児童書、辞書のコーナーがごった返しており、中にはわざわざ関西から来られて大型の段ボールに数箱買っていかれた人もあってこのところ店頭で洋書が売れなくなっていること等にわかに信じられないような気がした。バーゲン、コーナーが賑わうのはいつものことといえるが、東急百貨店日本橋店の店じまいセールがあれだけの売上があったことを考えても需要そのものが必ずしも大幅に減退してしまっているとは一概にいえないことを改めて考えさせられたことであった。

今回の「ブックフェア」でこれまでと一番変わったことといえば和書のバーゲンだろう。4月23日が「サン・ジョルデイの日」とかで今年の「ブックフェア」もこの日に合わせて開催されたようだが、会場に「サン・ジョルデイの日」特別ブースが設けられて2－3割引セールで賑わっていた他、ブックオフのコーナーで文庫本が「新品同様の古書」とはいえ一冊100円で売られており、再販制度もなしくずしになってしまうのではないかと思われたほどであった。その他の出版社のブースでも2割引程度で販売されており、かくいう私自身も暇をみては和洋書併せて毎日数冊ずつ買っていたのだから本好きな人にとっては魅力的なフェアだったといえるだろう。この場で再販制度の是非を問うつもりはないが、本来版権の売買と取り引きの場であるはずの「ブックフェア」もすっかり変わってしまったようである。「フェア」を企

目　次

東京国際ブックフェア'99 ……1・2
うちの会社 ……2
1998年洋書輸入統計（参考資料）…3
理事会報告・PRコラムほか ……4
出版文化史逍遥(36) ……5
日本語の包容力……6・7
広　告 ……8

画するReed Exhibitionもこの変質を気にしないわけではないだろうがこのままでは今後もこの傾向が継続されることになりそうである。

今回の「ブックフェア」に参加して良かった事の一つとしてしばらく振りに業界のOBの方々と旧交をあたためることが出来たことであった。また、バーゲンコーナーでも何人かの入場者や海外からの出展社から洋書協会について聞かれることがあった。そこで考えたことだが、洋書協会としてこの「フェア」に参加しているのも洋書バーゲンコーナーだけというのもいささか寂しい感じがするが、次回には協会として小さなブースを出して「洋書なんでも相談コーナー」等を設けてみてはどうだろう。コストもかかることであるし、なぜ洋書が高いのか等クレームの方が多いのではないかと心配されるむきもおありかと思うが、インターネットがこれだけ急速に普及し、インターネットで直接購入したほうが早くて安いという面だけが喧伝されている現状を考えると業界のPRとして考える必要があるのではないだろうか。協会のブースがあれば業界のヴェテラン、OBの集まりの場を提供することが出来るし、ヴェテランに相談にのってもらうことが出来れば新しいPRの場となるのではないだろうか。

インターナレッジ・ブックス　塚本記

写真提供：丸善(株) 出版事業部　服部修治氏

うちの会社

株式会社　東亜ブック

1966年創業当時の＄レートは１＄360円。社名は東亜ブックエクスポート、理工医学系洋書、和書バックナンバァの輸出を本業として内田と２人でスタートしました。昔懐かしいChemical Abstracts、Biological Abstracts、Excerpta Medica 今では見向きもされない雑誌がその当時は売れすじでした。折からの大学新増設ブーム、輸出一辺倒から輸入に切り替え社名も(株)東亜ブックに変更しました。当時より世界の古書バックナンバァ市場をリードし続けた海外の業者も社会の荒波には勝てずJohnson、Kraus、Canner等主要な古書店も次々と姿を消してしまいました。幸い私共は小人数で理工医学系バックナンバァのせまい分野しか扱わず、現在も専門スペシャリストとして頑張っております。昨年よりインターネットのホームページも開設しました。洋雑誌、和雑誌の理工医学系分野バックナンバァのセット、欠号補充お問い合わせ頂ければ何かのお役に立てるかと思います。

鶴　三郎

1998年（平成10年）１月～12月の洋書輸入統計（参考資料）

会報委員　荒木　亮一

7．参考資料

（表10）輸出通関統計　　（単位　百万円）

分類	品目	97.1-12月 輸出価格	98.1-12月 輸出価格	前年比	構成比
書籍及びそれに類するもの	単一シートのもの	121	439	363%	
	辞典及び事典	134	146	109%	
	＊その他のもの	17,351	16,679	96%	
	幼児用絵本（97＊に含む）		50	—	
	小　計（1）	17,606	17,314	98%	79%
	楽　譜	—	97	—	
	地図・海図	—	16	—	
	小　計（2）	17,606	17,314	98%	79%
新聞・雑誌	一週に４回以上発行するもの	116	115	95%	
	新　聞	5			
	雑誌その他の定期刊行物	4,697	4,396	94%	
	小　計	4,818	4,511	94%	21%
計		22,424	21,825	97%	100%

注：地図・海図は製本されたもの。
　　新聞は統計表では区分されていない。

（表11）輸出通関統計　　（単位　百万円）

歴年	書籍			新聞・雑誌			計		
	価額	前年比	指数	価額	前年比	指数	価額	前年比	指数
1989	29,714	104%	100%	4,478	106%	100%	34,192	105%	100%
1990	31,730	107%	107%	5,141	115%	115%	36,871	108%	108%
1991	29,296	92%	99%	5,085	99%	114%	34,381	93%	101%
1992	28,056	96%	94%	5,163	102%	115%	33,219	97%	97%
1993	23,154	83%	78%	4,949	96%	111%	28,103	85%	82%
1994	20,512	89%	69%	5,018	101%	112%	25,530	91%	75%
1995	18,111	88%	61%	4,872	97%	109%	22,983	90%	67%
1996	18,742	103%	63%	4,742	97%	106%	23,484	102%	69%
1997	17,606	94%	59%	4,818	102%	108%	22,424	95%	66%
1998	17,314	98%	58%	4,511	94%	101%	21,825	97%	64%

輸出統計―書籍、雑誌、新聞

＜分析＞

1998年の書籍、新聞・雑誌の輸出は前年比で97%とほぼ横這い状態である。過去最高の輸出額であった1985年を100とした指数を加味すると55.5%とほぼ半減している。これらの数値は、今の日本に求められているテクノロジー、医学等、重要な分野における新しい知識の輸出促進の必要性を示唆しているような気がする。

8．輸入と輸出対照表

（表12）

分類	1989	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
輸入	55%	55%	58%	59%	61%	65%	68%	71%	71%
輸出	45%	45%	42%	41%	39%	35%	32%	29%	29%

＜分析＞

1989年以降10年間の輸入額と輸出額を単純に合計した数値をみると、最高であった1992年が792億円、最低は1995年の649億円、年平均約740億円強で、年毎にアップ・アンド・ダウンはあるものの、700億円を軸に推移している。しかし、輸入と輸出の比率から見て分かるように、輸出の不振は10年来続いている。世界のリーダー国として、出版界はもっと外に目をむける必要があるのではないだろうか。因に、書籍、新聞・雑誌および幼児用絵本の輸出先トップ・クラスは、米国（81億円、37%）、台湾（23億円、10%）、香港（18億円、8%）、韓国（11億円、5%）、ドイツ（10億円、5%）、中国（10億円、5%）、英国（7億円、4%）、そしてシンガポール、オーストラリアと続く。

（終り）

今回は、輸入・輸出の統計を必要とされる方々の便宜のために品目番号（輸入・輸出とも同番号）を示した。合同庁舎４号館の資料室で、パソコンを使って簡単に閲覧できる。また、コピーの入手も可能である。

理事会報告

4月19日（月）

1．総務委員会作成の1998年度決算報告書及び1999年度予算案を一部修正して承認し、理事会案として定時総会に上程することとした。

2．総会議事及び議事進行を点検した。

・「規約改正」総括、「日本複写権センター申入れ」及び「会員増強運動」に関する現状と今後の展開については、特に担当理事が報告する。

3．現在協会経理に採用している勘定科目に、実態に合わない部分があるので改訂試案を作成する旨の総務委員長の方針を了承した。

4．共同物流プロジェクトは総会後に再スタートさせる。

委員会報告

〈事業委員会〉

4月22日（木）から4月25日（日）までの4日間、東京ビッグサイトで行われた東京国際ブックフェアの「洋書バーゲンコーナー」に参加しました。参加社は、昨年と同数の12社で、ワゴン44台に特別価格の書籍、CDなど1万数千タイトル、約3万点を並べ販売いたしました。

会期が昨年までの1月から4月に変わったことで、お客様の集まり具合はどうなるのか、これまで人気のあったカレンダー類が、時期的に見て商品価値が落ちてしまうだろう等という懸念を持ちながらの開催でした。

そんな状況の中での我々のコーナーは、昨年よりスペースがやや広まりワゴンの間に通路を作ることができ、人の流れはスムーズになったのですが、和書の安売りや、土曜日の悪天候の影響により、販売部数、金額とも昨年実績を大幅に下回り不本意な結果となってしまいました。

2月に参加の呼びかけを行ってから、商品の調達、値段付け、スリップの作成、商品の搬入、現場での販売そして搬出などに多くの人がこの催しにかかわりました。特に現場での販売では若い人たちが中心になって、一生懸命お客様と対応する姿をみて、委員としてうれしく感じました。

なお、今年の売り上げの中から、各社のご賛同を得て20万円を協会の活動費に寄付いたしましたことを報告します。

洋販　尾内記

お知らせ

太陽洋書(株)のE-mail addressが以下のように決まりました。TEL、FAXに併せてご利用ください。

sunpub@mvc.biglobe.ne.jp

PRの欄

日本出版貿易株式会社フランス法人
CULTURE JAPON S. A. S.
《第一・第二号店開店のお知らせ》

パリ日本文化会館一階の店舗に引き続き、第二号店をオペラ座地区に開設しました。両店とも日本名を**文化堂**と命名、一号店は日本の伝統工芸品・文具・雑貨、フランス書などを中心に、又二号店は日本の書籍・雑誌・音楽CDを中心に営業を行っています。なお、所在地、TEL、FAXは下記のとおりです。

第一号店

文化堂　日本文化会館店
101 bis, quai Branly
75015 PARIS
Tel : 01 45 79 02 00
Fax : 01 45 79 02 09
地下鉄駅 : Bir-Hakeim（6番線）

第二号店

文化堂　オペラ店
29, Rue Saint-Augustin
75002 PARIS
Tel : 01 42 60 00 66
Fax : 01 42 60 01 11
地下鉄駅 : Quatre septembre（3番線）
Opera

出版文化史逍遙―西から東から―(36)

明治初期の目録に見る洋書〔8〕

丸善・本の図書館　鈴木陽二

◆明治9年洋書リストに見る輸入の状況（8）

【マコーリ卿と明治の思潮】

丸善明治9年洋書目録には、マコリー卿の著作として8巻ものの全集、4巻の廉価版全集、『エッセー』『イギリス史』（5巻）がリストされている。マコーリは今でこそ知る人の少ない学者になったが、明治期には、日本の近代史学形成の過程で、また欧米文学受容の上で、あるいは自由民権運動に対しても、その影響は実に大きなものであった。西洋の学術・思想吸収の歴史の中で看過できない碩学であった。

マコーリ（Thomas Babington Macaulay 1800-59）は19世紀中葉のイギリスにおいて、歴史学者、政治家、文学者として、幅広い分野で活動した人物であった。1825年に『エディンバラ評論』誌に「ミルトン論」を発表して一躍名声を馳せ、その後ホイッグ史観に立った多くの文芸評論、歴史評論を発表して著述家としての地歩を確立した。政治家としての活躍も華々しく、ホイッグ党の下院議員として雄弁で知られ、選挙法改正やインド問題などで多くの実績を残した。

議員を止めてから文筆生活に戻り、1848年から61年にかけて畢生の大作で、彼の主著となった『イギリス史』全5巻（"The History of England from the Accession of James Ⅱ"）を上梓した。この著作は「その明快な立場、説明の巧妙さ、平易で力強く美しい文体と相まって、おりから自由と繁栄に酔いしれていたイギリスの大衆に絶大な人気を博した」（今井宏『明治日本とイギリス革命』）と紹介されているように高い評価を受け、その功績によって男爵が授けられたという。

ところで、日本で何時ごろからマコーリを摂取しだしたのか不明であるが、『イギリス史』自体はすでに幕末に輸入されている。『葵文庫　江戸幕府旧蔵洋書目録』には1864年版の2巻が「開成所」の旧蔵書として掲載されており、別にオランダ語訳5巻もの（1851-57）も同じく「開成所」旧蔵ということで収録されている。また国立国会図書館でも「蕃書調所」旧蔵のオランダ語訳第1巻～3巻（1951）が所蔵されている。「蕃書調所」の収蔵品は安政3年（1856）～文久2年（1862）、「開成所」のは文久3年（1863）から明治元年までの収蔵となり、いずれも幕末には輸入されていたことになる。どういうルートでどういう機会に入ってきたのかは不明であり、実際に読まれたものかどうかもわからない。

このようにマコーリの著作は早くから入っていたが、明治になってから急速に普及し、英語を学ぶものの必読の書として広く教科書に使用されたばかりでなく、その美文調の文体が歓迎され、また知的思想涵養の書として知識層や青年層に愛読された。教科書で使用された数例をみると、外山正一は東京大学や東京専門学校（早稲田大学の前身）で『ヘスティング伝』『クライブ伝』『ミルトン伝』などを講義し、札幌農学校ではサマーズ（お雇い英文学教師）が『古代ローマ詩譚』を教材とし、そのほか錦城学校（明治13年創立）では『アディソン伝』、東京英語学校（明治7年創立、第1高等学校の前身）では『ヘスティング伝』、国民英学会（明治21年創立）では『クライブ伝』と『ヘスティング伝』などが教授されたことを佐藤孝己先生が紹介している。

マコーリを積極的に受容したのは、徳富蘇峰であった。彼のマコーリとの出会いは、明治13年に神田の古書屋で『エッセー』の原書を購入したときであった。そしてその文章に感激して読みふけり、人生観、世界観を変えるほどの衝撃を受けたという。彼は故郷熊本に帰って自由民権結社「相愛社」に関係したが、明治15年に自由主義教育の実施を目指した民権私塾「大江義塾」を創設した。同義塾は、当時において数少ない洋学教育学校のひとつで、課程表をみると、カーライル、スペンサー、バジョット、ミル、フォーセット、ギゾー、ジェヴォンズなどが教科書として使用された。いずれもこの時代の日本で広く摂取され、耽読されていた著書であった。マコーリについては、「マコレー氏英国史」や「マコレー氏文集」「マコレー氏英国憲法史評論」「マコレー氏ミルトン論」「英文学」などが高学年向けの教科書として講読されていた。〔参照文献：今井宏『明治日本とイギリス革命』／佐藤孝己「明治啓蒙期とマコーリ」『英学史研究』第5号／小沢栄一『近代日本史学史の研究　明治編』／田中啓介『熊本英学史』〕

日本語の包容力

島岡　丘

これまでは、私たちの日常生活で、外国から新しくあることばが入ってくると、それをカタカナに直して日本語として受け入れ、なに不自由なく使ってきた。たとえ日本語にない外国語の音があっても、その原音をその通りに発音しようとせず、日本語のうちでもっともそれに近いと思う発音をしてきた。一例として、アメリカの大統領の名前を取り上げてみよう。Reagan は「レーガン」、Lincoln は「リンカーン」、Roosevelt は「ルーズベルト」などのように書き、日本語としてRもLもラ行音、vもbもバ行音として発音してきた。

母語の発音で代用するということは日本語使用者間で、円滑に情報を伝達し合うためにも適した方法であると思う。しかし、上例のように、R と L をどちらも日本語のラ行音にしてしまうことや、v や b も区別することなく、どちらもバ行音にしてしまうことで問題が起きることもある。まず L と R についてであるが、パソコンの普及で問題が生じてきた。画面にマウスを走らせることは、英語では r で始まる run と言うが、これを日本語にある音で、「ラン」とし、LAN (Local Area Network) システムも「ラン」である。このように、外来語をすべてカタカナの枠内に「押し込んでしまう」従来の方式では、l と r の発音の違いを習得を英語のクラスでやればよいと、「先送り」してきたわけである。このままだと、英語の先生が l と r の区別ができないと、その先生のクラスにたまたま出るようになっている生徒達は、l と r の区別ができないまま大人になってしまうことになる。カタカナで「ラン」と書かれていると、昔小学校のとき歌ったなつかしい雨降りの歌を思い出してしまう。「雨が降る降る、母さんが、蛇の目のお迎え嬉しいな、ピッチ、ピッチ、チャップ、チャップ、ラン、ラン、ラン」。

一方英語の時間でr音を徹底して学習できる機会は "Row, row, row your boat" の童歌と R. L. Stevenson の "The Rain" であろう。

"Row, row, row your boat, Gently down the stream. Merrily, merrily, merrily, life is but a dream."

この歌には r が語頭に 3 回、語中に 3 回、子音連結中に 2 回、語末に 1 回出てくる。"The Rain" の詩は

"The rain is raining all around,
It rains in field and tree.
It rains on the umbrellas here,
And on the ships at sea." のようになっているが、r は語頭 4 回、語中 1 回、語末 1 回、子音連結中 2 回出てくる。

このような口調のよい詩は中学の英語教科書に掲載され、自然に暗唱できるようになるのが望ましい。そうすれば、r 音が出せなくて困るということがなくなるのであるが、必ずしも r 音が出せるようになっていないのが現状である。

一方、l のほうは、gently のような t が前に来る場合は特にむずかしい。その理由は日本語の舌の動かし方にあるのではないのかというのが私見である。日本語はあまり舌先を使わないで発音する場合が多く、舌先を使う場合でも前舌と連動することが多いので、l のように舌先だけを歯茎につけて舌の両側から声を出す言語習慣がない。だからと言って、r と l との区別が日本人ができないということにはならない。私は LAN は「ˣレアンˣ」、run は「ᵛランˣ」と表している。

l と r とが対立音として生じる文は次の通りである。

1) A little language goes a long way.

2) A little language goes a wrong way.

1) のほうは、「現地のことばを少し知っているだけで、とても役立つものだ」の意味で、2) は「ことばを少し知っているだけでは、予期しない方向に行ってしまうものだ」という1) とはまったく正反対の意味になってしまうのである。私は英語の勉強でlとrはとにかく区別されなければならない、と心に決め、学生にはカナを使って次のように教えているが、このやり方は効果がある。(参照：拙著『目から覚えるスラスラ英語』小学館

long way　　wrong way
ˣラーンᵍウェイ　　ᵛラーンᵍウェイ

私の過去10年ほどの関心は、英語の先生に頼らずとも、l と r などを日本語で区別できないかどうかということであった。l と r のようにヨーロッパ諸言語にある区別を日本人が識別できないということになると、日本語が世界の諸言語とのつながりから孤立してしまうのではないかという心配がある。インターネットを使う基本的哲学は、お互いに情報をシェアするということであり、職場間、家庭間、ときには個人々々もインターネットで世

界中とつながった以上、一言語内でしか通用しない文字表記は包容力のないものとして、外国人の目に写る。

従来の「ことばの輸入方法」は日本語にない英語音がたとえあったにしてもそれに近い日本語を与えて、日本語読みをしていたわけである。英語のｌとｒの区別については上に述べた通りであるが、ｖとｂについてはどうであろうか。

ｖにあたる音が日本語にないため、これまでは、ｖとｂの音と一緒にして「ブ」で表す。例えば、video は「ビデオ」、TV は「テレビ」、van は「バン」のように読み替えをしてきた。国内ではそれで通るが、輸出に社運をかける多くの日本企業にとって、この方式ではいくつか不都合が生じている。一例として、最近商品化された新車名の VITS を取り上げよう。日本語にはｖの音がないので、従来方式では「ビッツ」となる。しかし、英語圏に輸出する場合には、「ビッツ」よりは「ヴィッツ」のほうがよいであろう。もし、「ビッツ」としたら、その英語は bits となり、bits and pieces で、かけらのようなものが回りに散らかっているような意味になってしまい、イメージが悪くなってしまう。VITS はあくまでも「ヴィッツ」である。

日本人の発音はとかく批判されがちだが、その原因は日本人自身が作っている節があるようだ。長年続いてきた文字依存社会のため、通じなかったら文字を示せばよいという文字優先の気持ちがどこかにあり、通じさせるための工夫と実践をあまりしないのである。その一例がｖとｂの違いに対する日本人多数の反応である。ｖの発音を出すのに、上の歯と下唇を噛んで発音し、ｂは両唇を合わせて発音すればよいというように覚え込んでいる日本人が実に多いようだ。それは部分的に正しいが、大事な部分が欠落している。それは、「口の構えさえできていれば英語らしい音が出せる」という楽天的な考え方である。多少専門的になるが、ｖとｂは第一義的には「継続性」の有無である。英語の子音は「閉鎖音」かそれとも「摩擦音」かの区別がはっきりとしている。つまり、ｂは「両唇をしっかり閉じて、声を貯めてから吐き出す」（非継続的）のに対して、ｖは「上の歯に下唇を近づけることによって、出す声が摩擦を伴うようにする」（継続的）というように習得させたいし、またｂについても両唇を合わせるだけでなく、英語の場合は日本語よりも強く両唇を閉じるようにしたいものだ。

大学時代は、一般に音声の指導よりはむしろ読解力の養成に力を注いでいたこともあり、また、英語のネイティヴとことばを交わす機会が少なかったせいか、ｖとｂの区別など、文字上違っていれば、実際にどう区別して発音するのかよくわからなくてもよかったと思っていたようである。日本語になくて英語にある区別にはあまり注意を払って発音指導はどうしても二の次になっていた。

急速にパソコンが普及し、最近では手紙のやり取りもＥメールで行うようになり、新しいライフスタイルが生まれつつある。今「ライフスタイル」と書いたが、これを英語的に言うならば、カナ表記で次のように示すとよいであろう。

lifestyle「ˣ**ラ**イウ°　スタイウ」

life は「ライフ」ではなく、「ˣ**ラ**イウ°」のほうが英語に近い（f＝ウ° は v＝ヴと（無声/有声の対立））。また、style は「スタイル」ではなく、「**スタ**イウ」としたほうが英語に近くなる。現在の中学高校で発音記号がよく理解できない学習者が少なくないが、カナ表記を併用することによって、英語の音声習得がより容易になることが期待できるであろう。

最近は原稿の作成・提出もパソコンで行うようになり、出版社も手書きの原稿ではなく、ファイル（英語に近い表記では「ウ°ァイウ」）したフロッピー（英語に近い表記では「ゥ°ラーピィ」）を提出するようになった。時代の変化はことばの変化に表れてきたが、日本語を使ってパソコン英語をカタカナで英語らしく表現することが不可能ではなくなったことを感じている。

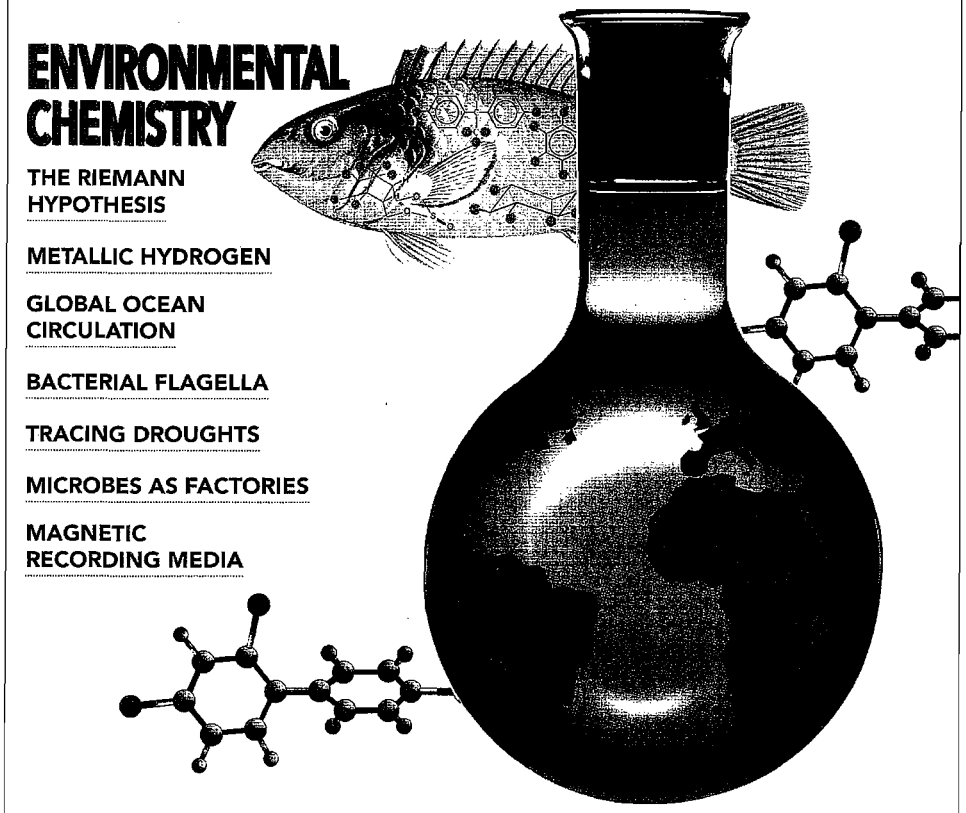
インターネットなどはほとんどアメリカから入ってきたせいで、パソコンに関係する英語の語彙が数多く作られた。英語をある程度知っている人であれば問題がないが、英語学習の途上の日本人には解決しなければならない問題が二つある。一つは英語の強弱リズムをどう表すと良いかという問題であり、もう一つは、日本語にない英語特有の音を如何にして通じる英語をカナ文字で表すかということである。そのかなりの部分は英語教育者の間では今世紀内に結論が見つかりそうである。学習者が難儀している発音記号に代わって、小学生でも使えるカタカナ表記で英語が音読できるという時代を迎えつつあり、パソコンや CD の活用と相まって日本人が英語を自由自在に自信をもって運用できるようになるのはさほど遠くないであろう（拙著『シニア英語会話―リズム・カナ・パソコン英語表現つき―』小学館プロダクション）

（茨城キリスト教大学教授）

Gordon and Breach Publishing Group

SCIENCE SPECTRA

THE INTERNATIONAL MAGAZINE OF CONTEMPORARY SCIENTIFIC THOUGHT



科学者による科学者のための雑誌“Science Spectra”は、専門分化された化学領域の垣根を取り払い、各研究部門間の討論を促します。退屈な専門用語を使わず、明解で興味深い論文を掲載しているため、専門分野以外での重要な学術上の進展を随時知ることができます。世界各国の“Science Spectra”編集者、著者が読者を現代の科学研究の最前線へといざない、今日の科学の全域にまたがるフォーラムを提供します。

年間購読料(4冊) ¥11,000 (税別)

お申込み、お問い合わせは下記まで。

YOHAN(日本洋書販売配給株式会社)
〒169-0072 東京都新宿区大久保3-14-9 雑誌グループ
電話03-3208-0187(直通) FAX03-3208-7651

1999年5月　通巻第384号　日本洋書協会　編集者 高橋 紘
〒103-0027 東京都中央区日本橋1－21－4 千代田会館5階20号室 ☎(03)3271－6901 FAX.(03)3271－6920

印刷所＝藤本綜合印刷株式会社